椿説弓張月　前編巻之六

鎮西八郎爲朝外傳　椿説弓張月前篇巻之六

東都　曲亭主人編次

第十四回

龍江粮を饋りて配軍を憐れむ
爲朝嶋を領して酷吏を聽

爲朝ハ茂光ヨリ二日先ダチテ。伊豆國ヲ著ノ〻シ〻ベ。白縫紀平治ガ千貫の旅宿を鬧せしを。只白縫ハ筑紫ヨリ陣没ス。カヽル。狩野介茂光ハ爲朝の残黨を詰リ。信西ガ前見の謀畧ヨリ。果シテ爲朝を奪ヒ。ソレ〻ヨリ。訪ビ。軈テ歸國シ。嶋の代官三郎太夫忠重といふものを呼ビ。爲朝を預遣シ。少シモ憐ムのみならずソ仰ル。この三郎太夫忠重ハ稟性貪婪便佞の小人ナリ。神をも崇めず。佛をも尊ばず。只

利をこゝろゝゝに仇とも交て。銭をあさるゝ親戚も他人のごとく。生平を測民を究て。非義非道おほりつる報ひや。妻は奇疾ゝゝゝ子はなし。ゝゝゝ

今との石へ尻をかゝれバ伽とうとする。又うぢぞハ何とうとすると宜ひて。その
邊へも立よりあるぞ。否といでゝ打も倒さゝるべき光景なれハ忠重忽地
とゝ泳ぐ五分の怕ぢを生じ。この爲朝ハ音ふゆゆゆ剛者なるぞ。尋
常の流人と等しく威勢をとりつゝ制しゞかんまづゝさわを見
せゝ。ものづゝ帰伏するのちゝ。ゆを行いでやゝ。俄頃ハ人家遠き
山蔭ハあゆの穂屋を造りつけゝ。其処ハ爲朝を行セ日ハ只一碗
の粮をゑへゝその餓つゝゝをぞすちゝゝりる。志ゝふ三郎太夫が女児
簫江へりのを憐むのとゝ泳ぐれバ。父がゝ行ひの。今ハそじめざる
ゆふあれどゝ。ゝ傷痛くゝおぼえ。これを諫ゝしゝふゝとのゝ人の
語りを伝ふ彼爲朝と申ハ智勇世ハ勝ぢ射ゝいふしゝふも
ゝ人ゝとゝや。今とそかゝゝ左せ免されゝ帰洛しゝふ欲。

さゝゝも嶋人その徳ハ感じゝ主とし仕ゆを願ひその威徳遠き
ゝ父の右ハあゝべ。かゝる人をハゝ勅ふべきふゝ情あゝ待し
ゆゆ。禍の芽ゝゝゆも久しかじ常言ハ慈悲ハ人の爲ふゝとゝ
ゝいゝゝ。ゝ芽ハ迎とりゝ誠心を示しゝゝ道理を説
ゝ諫ゝ。忠重一切うけゝ。とゝおのれがゆゝるゆもあゝぞ。少納言
入道の仰ありゝゝ主君茂光の叮嚀ハ伝ゝ芽ゝ
ゝハ迎ふべき。用ひざるゝゝハ虎も嵐ふ劣れとゝゝを伝ゝ彼縦
智勇勝ゝとゝゝも怕ゝゝハ足ゝとゝゝ。ゝ強顔ゝあり
ゝゝ簫江ハふゝ憂ゝ。潜ハ嶋婦を語ふ。日毎ハ饋ゝ。御曹
司を慰問せゝり。この嶋の男子ハ髪を結ぜ女子もとれふひとゝ。
紅粉ゝどいふものハ世ハありとも名ひゝゝぞ形状とゝかゝおどろ

しれ。心さへ淳朴ゆゑ。人欲の私薄く。仮初にも偽かざるは。只憂るところのものは五穀登らざるを。食ふを。この故に人もあふてはかなきぞ。

あさげいとあさとしふとぞ。これ朝飯を食ひまひしうとしいふものゆゑ。國地の良賤人と會はるゝ暑寒を述るごとし。その食を貴ぶこの一條ゆゑも。かの例を少つけても都會繁花の地に生れて。飽まで食ひ温ゆ被寓然として天年を終る人を。こそあるこさ分の幸福ゆゑ。實有ぐるもしかし。案下某生再説為朝ふ。

彦江が好意に感じおほ。日毎に物を送り来る嶋婦ゆゑ。親しくものいひまゆゑ他人も又その徳を慕ひく。彦江が饋の外ゆも。乾る魚束る薪をどるを。かるく進ませ有一日一人の嶋婦が進ませ魚を食ふその味甚美し。こよくも漬る鮓うまく賞ずるに。嶋婦がいふやう。これはこれ漬るゆゑ。ゆゑ。澳ゆ鵜といふ鳥あり。魚を取る餌とし。仕ふ駿魚をとりる時は食ひ殺せるを。岳の挾間など貯置ゆゑ。浪に洗れ潮に浸りくかの如し。伊豆の國人はこれを鵜鮓といふ。なほ稀なるゆゑ。為朝縁故をもつて。往年れ豊後國ゆ。木綿の山邊なる紀平治といふものを訪ふ。猴酒をもつて當日の管待せ。これ今又こゝゆ諭さる。この饋に得る。猴酒鵜鮓は世に山海一對の珍味と稱ぞ。さてもこれ。口ゆ果報ありとて笑ひ。嶋婦もいとこれ。おのが家路ゆ帰りぬ。今茲もまた。保元二の春も弥生のこゝの。春も弥生のこゝゆ原来この嶋は去年

烏朝鵠居ホ
老鶴を慰る

の冬ごもり人暖ふく雪の降こもるうゝ祖よ。春ハ殊さら住よくいのゞ
葦鹿鳴く。浦の笘屋ハ風をいとゝ。嵐うつ浪ハ夢をやぶれ。森ハ人
ゝひゝさ暁ハ。鶴の鳴声ハ冴えゝ。ゝ鳥朝拭を欲ゆゝ。奇ゝ
うゝこの嶋ハ。獣ハ牛馬猫鼠の外ハ。鳥ハ鴈鴨さそハ尋常ゝ
小鳥ゆゝのゝめさゝ。渡り来ると。ゝひゝ。今鳴ゝのハ鶴ゆやゝ
かゝる鳥も又稀ゝハ。渡ゝこそとゝ。むとゝごち。ゝて起出ゝ人ゝ果
ゝゝ一隻の鶴飄ゝ然とゝゝ飛来ゝり。ゝとゝちゝう下ゝゝさ物の響
あゝこゝろつゝゝ眼をとゝゝ。腐ゝるゝ足ハ著ゝる黄金牌なりゝれば
泫然とゝゝ懐舊ゝ堪ゝ。ゝ是ゝ羊。ゝれ琉球國より得ゝ
ゝゝり。鳥羽上皇ハ獻ゝ。ゝを。又放ゝせゝひゝとゝるゝ。ゝゝ往返ゝ
ゝ既ハ三ゝゝ及び。今又ゝゝみゝ。ゝゝ故ゝゝとゝゝ

ごち。撥ゝせゝ彼牌をゝゝゝハ牌の背ゝ墨ゝゝく。

眠柳閑花遶水亭　仙禽再去還東溟
逢春便覺孤霞迥　清影何時照我庭

と写せゝゝゝゝゝ讀をゝり。ゝゝ尋思ゝて宜ゝゝ親兄弟ハ
ゝゝゝゝ。妻子眷属ゝゝ死亡ゝゝ。今ハ爲朝をおりゝんゝの世ゝ
あゝゝとおぼえゝゝみゝゝハの人の筆ゝゝゝゝゝの人ハ誰ゝもあれゝ。ゝゝ
ゝゝ。彼牌ハ水を沃ゝゝ。袖ゝゝ楚ゝゝ印ゝゝ文字ハ左旋ゝゝゝゝ。
衣の上ゝゝゝゝゝ。ゝて柔ゝゝ筆をゝり出。又ゝの牌ゝ。

いゝゝのためゝゝゝいづゝゝゝゝゝ

嶋人をゆびさして。そこに行るものあるとバかやかくさとがめ。嶋人
答へいはく。縁故をもつぐでや立まるとの嶋おハむらより。野牛野馬おゐて
あれど。いと猛くして人をちうつけねバ。これを養ひ物を負せんとまゐ人ハ
なく。只夏のそゞめよ鰹を釣ゝ。牛の角を用ゐ餌とまるゐ春の
季よ至る毎ふ浦曲よ住むりの隊をなし。野山よゆきて牛の角ハ折
るゝ。常ハ輙く折ゝまりのるゝねど。木芽の萠出るころハ只一打ゐく
落るゝこそ。もれども彼牛ゝ。人をこゝ丈ゝあれ出角突よ衝人ゝまる
を。鈍きりのハ走路をうしなひ突倒されく痍を被て。矢庭ゐ死まるものも
あり。このさゝ丈よ駭たゝ。馬もゝ逃ゝもよ走りまゐり。就ゝ人されゐ踏ゝ
ゝ人も少ゝ丈ゝ。ゝゝ牛を狩出まゝて。朝ゝ丈ゝ人を集會今の如く
喊の声を揚ゝゐゝ鳥朝とれを冷笑ひつゝ。

ゐよ駭の人力を費ゝやあるゝれ近曾肘の筋を断ゝとれバ力ハむゝ
劣ゝ。ゐ水牛をも屠ゝ。ゐゝ丈ゝ。ゝゝこの男ゐ
御導ゝ。ゝの処よ到ゐ人ハ果ゝ駭の嶋人ゐ法螺貝を吹喊ゝ声
を揚ゝゐおの〳〵長尺竿を合ゝ。野牛の角を打折ゝて立ゝ。ゐ
数百疋の牛馬狂ひ出ゝ。走りまゐる中ゐ他牛より一岌大ゝなる黄牛
あり。喊声ゐも怕ゝ。法螺貝の音ゐも駭ゝ。走ゝゐ馬よりゝゝて。
かけ駐むゝもあゐ。ゝゐ衆皆慌忙ゝ。一崩よ崩ゝれを牛ハ追人ゐ
ゝ。後ゝ走る一人を突ゝゐゝ。鳥朝吐嗟と立隅り。左
右の角ゐ拖纏ゝ。右ゐへ撲地と捻伏ゐ人ハ角ハ根よりわゝと折ゝ牛ハ
仰ゝゐよ顛転ゝ。反起人とゝるゝ。ゝゐを庁足ゐくその頭を楚と踏ゝ
ゝ動せゐ。ゝ繋ゝ苗よと仰ゝれ。人ゐゐ走り来ゐ項へや索を掛ん

為朝奮戰
牛を馬を捕ル

四足をや繋んと罵あふを爲朝うち笑ひて。牛ハ箇様ゝふゝ繋くるのぞと教へ嶋人ハそゞめくその鼻ふ索を引とまるをもて。竿の頭を切とり。とく〳〵鬜をつめて。やうや〳〵繋苗を祈りを。前面の山間より。長るあゝ馬よ駈立られ。十四五人の男ゝも息も吻あへず。迯来るを。馬ハ跚然とゝ〳〵蹄の音を高〳〵。矢を射ゝ〳〵跳かゝれば。爲朝佶とえまひて。行ちゞひちゝ鬣廻こ。閃と上よ跨ゝ。芝生高峯のとゝふひみて。糸廻ゝ〳〵飛し。野牛野馬を追詰〳〵。或ハ上より尾つを拖駐或ハ下とふり倒ゝ〳〵ふ猛き牛ハ振ゝ〳〵。角ゝ〳〵突んとるを物とも。ものゝ。下り立ゝ〳〵組伏せ捻倒ゝ。暫時ゝ〳〵百五十匹の牛馬を。輙く搦捕へ。嶋人ハ且驚き且歎ひ〳〵る地上ハ拜伏ゝ。君を寛人間ふハあゝ。天神ふゝ〳〵左ゝ。この地方ハ東海の孤島はていふゝ。

より人物おく。野ゝ牛馬あゝといへども。これを養狎るさへ。ものゝ。今君ゝ武勇ふよりゝ。不意もかゝる宝を。ものゝ。活業の助を増せり。願くハこの嶋の主とゝ。ゝ。ゝ。恩澤を施ゝ。嶋の代官三郎太夫忠重ハ奸曲ふゝ〳〵常ゝ民を寛ることゝ。ゝ。ゝ。吾們生ゝ。彼ゝ肉を咬んとおりゝ。久ゝ。誘ゝ。直ふ二郎太夫ゝ第ふ押よせ。詰腹切らせゝ日来の怨を散べゝと。異口同音ゝ。爲朝ゝ〳〵宣ゝ。汝ふ志をゝ。幸ゝ。ゝ。ゝ。今配軍とゝ。清和天皇の後裔ふゝ。八幡太郎の曾孫ゝ。いゝ。先祖ハ失ゝ。ゝ。ゝ。又この嶋ハ朝家より賜ゝ領ゝ。ゝ。ゝ。主ゝ。ゝ。ゝ。勿論なり。ゝ。ゝ。忠重ゝ。無禮をも処ゝ。彼ゝ。遺意棄られゝ。笞屋よりゝ。夜あゝせゝ。ゝ。ゝ。

夥の嶋人前駈後従して。山方なるものハ鎌斧を携浦曲なるものハ
擔櫓を拿て更ゐ臆なる手ぶもあり。忠重ハ弟ふを押寄たる。三郎
太夫忠重ハとのゝを伺ひ。大ゐ驚て。為朝ハ世の梟雄なるゐ。今又洲
民の心を得ふ。虎ゐ翼をそなへたる如し。彼と爭ひて命らしあんとす。
只顧誠心をあらハ。身を全くせんと深念し。俄頃ゐ烏帽子引被て。
女児簫江と。家隷を將て。道次ゐ出迎ふ嶋人ハとの光景をそなへ
さぶひ。左右ゐ打もうて得ぞ。忠重膝行頓
首し。為朝ゐ對ひ。それぞ。僞ゐ強顔待し。為朝威主命両な
ぶ重くして已てあさぶ。既ふ罪を曹司ゐ得て。悔ゐ及ぶ。
身の過を恐し。嶋の賞罰を仰せもとめ。あるゐ今より忠重を
家隷郎なるもアれ下さるぶ。と。簫江父の跡ゐ居かるゐ。

忠重先非を悔て言をる実情より出ぶり。曹司ゐ感ふ日本の
意志ゐ知ぶ。父が一命を助ゐ。父子主従ゐ為ゐ頭
を地ゐ著し。為朝ゐ宣ふ。忠重民を寛るの罪許ぶ。ゐ
あるぶ。既ゐその過を悔ふ下ぶ。女児簫江ゐ人ゐ信なる行ひ
り。父が罪を贖ぶ。これ市人の跨を潜る恥辱を禀ぶと以て
いぶ。嫖母が一挽の恩惠をおりぶ。汝忠重いよ〳〵意を翻て。野
心を存ぶ。これと仰ぶ。忠重簫江ハ。家隷ども大ゐ歎
ひぶ。為朝を第宅ふむゐ請し。厚くとれを管待し。又嶋人ハ
も食をふ。ものゝその家ふゐ。かゝ忠重ハ日あるゐ為朝
の館を造り。生〳〵。後し入ゐ。ある疑ぶ。ゐひん起臥れ
陪従も怠ぶ。女児簫江をもあるぶ。為朝ハ元来色を

鳥朝怒
三郎左衛門
籐江鳥朝
鳥丸朝雅
嶋君を生

好このみざまなれども。又その志をも空しくむなしくして。卧房しんぼう
石見ちの。簸江三年が孫より三人の児を産み。家子を爲丸と名づけ
を朝稚と名つけ。季は女子なり。嶋君といひしぬ。爲朝大嶋を管領
しまひとより。民に耕作蠶飼を教へ。こころ山野に徜徉して業を
めい善をあげ。不能をあらためこのひろきに洲民よろこび。父母のおりひ孫
なせり。さる程に爲朝は三宅新嶋神津利嶋御藏。そなへ五の嶋をも
わが従へ。数十艘の船を造らせ。往返國司に異なるこの嶋には狩野介
茂光が采地なれども。こゝに年の貢を出さるゆゑなれば茂光こゝを憤り
おりしも。嶋の代官忠重をいましめ。汝上蔦を塔とし。これをこゝに
忘れやなどいとしい懲せ。孫に忠重大に迷惑し。潛み嶋の産物を運
送するを爲朝ゆゑ。こゝ奇怪とて。忠重を責めれば怕れ
この事ばかりなるゆゑを。茂光そなへ恨み。忠重を呼びて
虐病し。嶋を出さるべいうもせんとすれども。只徒ふ年月を経
るとぞ

第十五回

白縫潮を志渡に汲む
新院生を鬼界に攀ぢる

白縫は往に千貫の郷なり。茂光が伏兵を切ちぶし。紀平治あとをもて讃
州へ立ちかへり。遺恨やるかたなし。ぬかりなく計策をめぐらし。讃岐院新院
この頃
窃かに伊豆の大嶋へ押こめ。此曹司と
一緒になりて。ゆゑを起こせり。東八箇國は輙く従へ。あと只管ふ
肺肝をくだく。紀平治ふもおりに孫をんのえるに紀平治がいのちをれば
もこのゆゑなるあらざるあらざるなれども新院はそもじめ當國の在廳散位高季

造りくる。松山の堂舎よ車一くるま。國司既よ直嶋といふところよ御所を造出し〳〵遷し奉り。四方よ築垣を塗まわし。只門一つをあけく。昼夜の守護嚴重なるべし。三度の供御を進らせるの対ハ人の出入るるを許さざるなり。かゝるに数多の軍兵をかゝ〳〵集ひ〳〵ちゝんとそなへ。ふるきものあらざるべし。憖よ爲損ぜば大嶋よ在まん御曹司のうへすぐも危うべし。時の勢ひを待べうと諫ゝ申せども。これも又そのようひみ〳〵でいよ〳〵命運の微なるをうち歎まひける。か〳〵保元の年号ハ僅ニ年ゝ〳〵をかりて。あくまで平治と改元ありけり。洛あハ去年の八月十日後白河の帝皇位を第一の御子。守仁王よ伝へ奉ニ條院〳〵ハ是也。こゝよ中納言兼中宮權大夫右衛門督信頼卿ハ。先帝後白河帝の寵臣なり。近習小納言入道信西と權をあらそふをり〳〵。信頼遂よ左馬頭義朝ハ相語ひ

平治元年十二月ハ。数千の軍兵を起し。上皇後白河上皇二條帝を押籠奉り遂よ信西が首を刎て。六條河原よ梟首ゝ〳〵るとふ於て信頼の威勢日来よ百倍〳〵。之公百官忘怖〳〵。その下知よ從ひ奉ら〳〵ものなし。去ほどに彼卿ハ短才淺智ふ〳〵〳〵ろ驕り。只前門よ虎を防ぎ〳〵。後門よ狼の入るるをもしらぬ。主上潛よ脫出し。清盛が西八條なる平家亭ふ入御ま〳〵〳〵。平家時を得く直ふ信頼義朝を攻むとふ待賢門の夜戦敗ぬ〳〵。信頼誅伏し。義朝ハ尾張の内海ふ〳〵。長田が爲よ害せられ。影の子〳〵ち或ハ誅せられ或ハ滴され。源既よ涸ぬ。名をなし。平家ハ栄華の春をむかへ。氏族〳〵よ高位高官を授け。ら〳〵富貴世の人の耳目を驚せり。かゝてハ白縫もいまゝ〳〵宿志を遂るなりとぞ。常言ふ中〳〵食べ山も空〳〵といふ。彩む蔭なるき主従ぶ

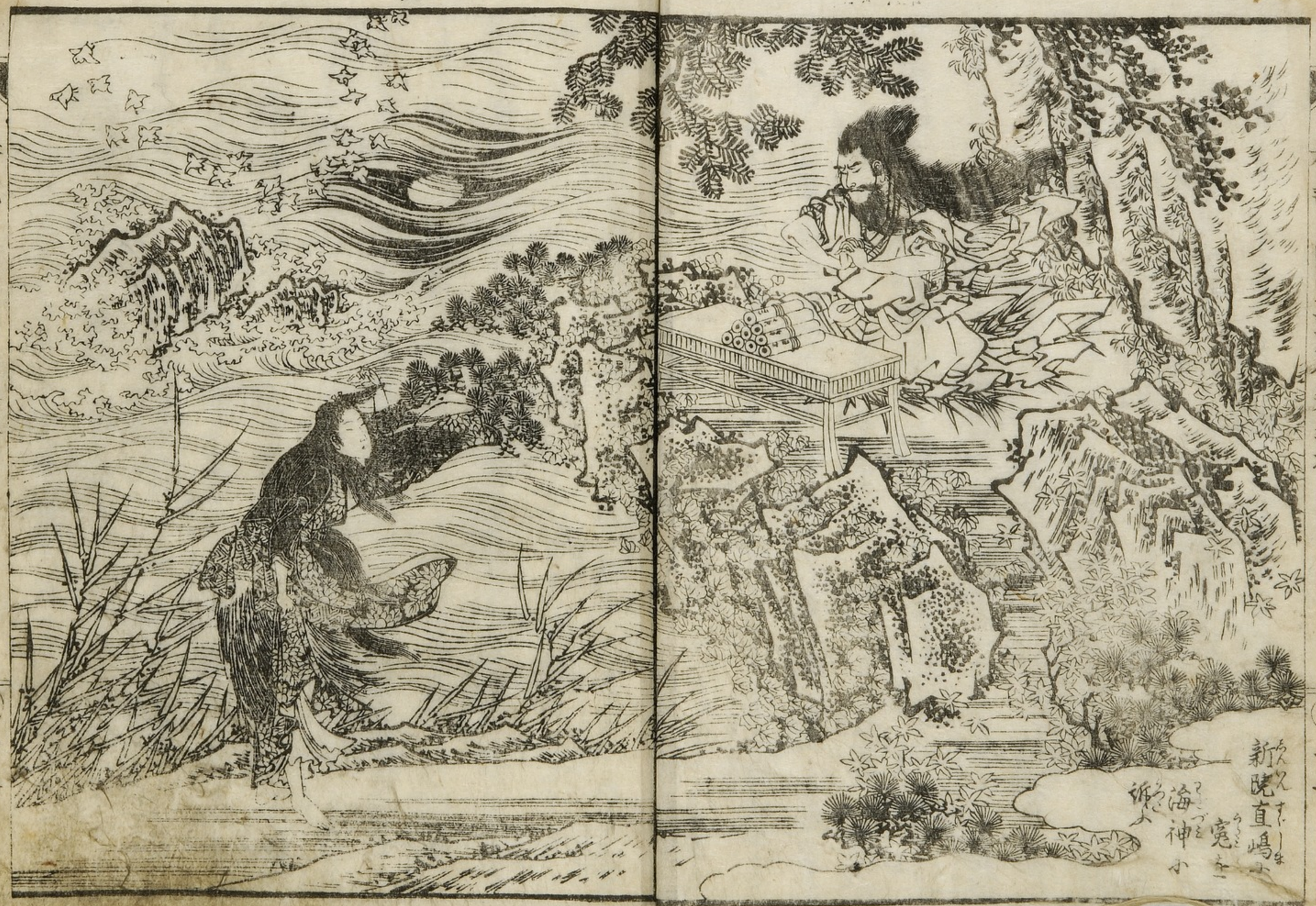
旦開の煙たてる。十人の女使も已とは知ぬ身の暇をあつておのゝ
さまゞなりゆく。今は紀平治と二人の女童のみ残りとぶらひし
志渡の浦曲ようつり住まひあぬ海人の業をつ潮を汲み貝を拾ひ
やゝくその日を送りまつる。紀平治はそゞめよう。女あるじ云ふ
居ゝんるを厭ひ。白峯こゝらゝ退居し。薪を樵炭を焼て
僅なる銭を得るにこれを志渡に送りく。白縫主従が衣服の助にせう
白縫は又海船旅人が江湖上の雑談をも耳を欹て曹司の安否を
たゞまぼ。おゞせ。有一日行僧が東路のはてゝる庠を鎮西八郎
爲朝は伊豆の嶋ゝを打たゞ。憚る氣色なく在まれば領主狩野介
茂光もりてあまし。今は彼嶋人船の往来を停ゝ。こゝ防禦の外
ふ爲出ゝるもあゝぞ。語ゝをはゝ。まゞうまくいはもして

大嶋へ消息。まが恙なきをもゝせ進ゝ。次よくはまが渡海を
やゝはおぼせも。浪風あゝ。青海原の稀ふ渡ゝも難ゝ。嶋への
往来を停られゝうとはあるまゞ。これも又ゝ仏せ。文ふの物忠
ひをまゝく。あゝまうしみを世をくるまゝ。ゝ八年の月日経く。長寛二年
八月下旬のまゝ。浦人おゝいひゝ伝ゝを伝ふ。さても新院は年来
此立願のまゝおゝまゝとなえしが。この七日ゝうは祝ゝ直鳴の磯方
ふ潜出るひ潮水は姿をうつゝ讀経しまゝ龍顔のいとおゞろゝしれ
を面あうえまりしのもありゝ。こは實語中ん虚言中ふんいと痛
しゝゝうゝさめたあまを白縫つゝとうちまく。まが身久しくこの
浦ふ住みゞふ。ゝ人の噂みれば情由をゝせまるよゝもあゝゞゝふ
りゝとのまゝ密語あゝへ玉體は親つたく。夫ゝうへをもまえまが誠忠の祖

白縫
苦節
志渡小
漂泊

をもちふせちゑべしと思量し。その夜の深るをまちて只ひとり直嶋ふ潛
ゆき御所のおとりを徘徊して彼此を尋ねてまつ且天御所よりハ遠き
なる浪うち際ニ磯馴し松一樹あり〳〵。彼処ニ人蔭〳〵見ゆ見こそと又
ひつ歩きよるふ新院ハ樹下うりさし出る巖石の上ふ結跏趺座し
さゝやなる机ニ経を載せ〳〵。ひとりハ置まつり寔ニむらしの龍顔まハあ
らぬとゝゑ〳〵。ひしとよりハいと窶てあひつ。剃こせまひし御髪のぬこ
ゝび長伸びゝるが。ハ鬗ふふり乱ニハ鬗なりとも長く垂く秋の柳ニ異
なるゝそ御衣もめし搖るゆゝりゝふゆゝ破ニ垢つさし香染の法衣のハ
袖浦風ニ吹翻されゝる間より白く細ゆゝしくハまの骨のゝ高くあらハ
れ指の爪も尖くゝえまり悲なるみ十善の君とし〳〵かく薄命ふ在ませ
ばこそとおもひなれハ涙のこゝあり落〳〵禀さんやうをもうたまへとこゝろふ

つゝ居るゝ人忍びゝるゝ。一声高くうち歎バ新院ハこの声ふく〳〵人あるゝを
ゝろし食ん。ゝづゆゝみゝえゝうゝまひ〳〵汝ハ誰そ〳〵問ゝふ白縫涙をうゝさ
ゝふひゝ〳〵とゝハ保元の戦ふ比類ゝうゝさ働し〳〵君を輙く落しまつふせる
爲朝ガ妻ニ白縫といゝるものゝ當時ゝふゝを太宰府ふありつゝゝ菊池
原田ふ攻ふれゝ父忠國も討死し。駿の家隷もゝる戦場ふ屍を曝し仕り
ゝふふも遂ふ撃ゝべゝりしを宗徒の郎等八町礫といふりのゝ救ゝゝ爲朝
も恙なく落ゝりゝゝゝゝ主従十人との讃岐へ迯れゝ。外ゝふ君の
ハ衛ゝもゝりゝゝゝべゝりふ折し。不意も夫の仇武藤太といふりのゝ殺し。
爲朝ハ既ニ擒れゝ。伊豆の大嶋へ配流ゝゝゝと仕ゝ。中途ふ奪ひゝゝ
人と謀ゝ。東路ふ走り。領人狩野介茂光ガ旅館を劫ゝふ。成らぬ
し〳〵むなし〳〵とふゝゝゝ。君を盗ニ出しゝゝ。松浦より大嶋へ押渡ゝ


新晓直嶋ノ
海神ノ

爲朝くもゐを討べうもなく身に從ふのハ一人の家隷と五二人の女使のみ外に助の兵士なく殊さら國司嚴重に守護しまれハ謀を施さるゝ事なく只徒に七年あまり今ハ八年の秋にもなりぬ時なる哉近曾に立願のるゆおハ〳〵ゝ夜あ〳〵潛出させまゐらせんと所さきに畏けるとて玉體を起尽てせめてハ年来の誠忠をもあらはせもあらばやとて〳〵有りと稟て新院そよ〳〵聞食ゝいと苦しげなる息を數回吻〳〵宜のまひ國司目〳〵忠臣あらはれ雪厭〳〵松の操を志ゝ汝おぼしめ〳〵朕堯舜の德なりいとゞも又桀紂の行にも倣ひぬ志ゝふ古院のたゝひとり〳〵位を體仁院に奪ひ遂恨やうこゝろ〳〵朕が不德のゆゑ而なりとおひ〳〵黙止せる體仁世を早〳〵後白河院に後ハたゝひとそあるべきそれ數にもあらぬ雅仁を位に即せるひいふべやか〳〵恨ふうこゝを累れて遂に

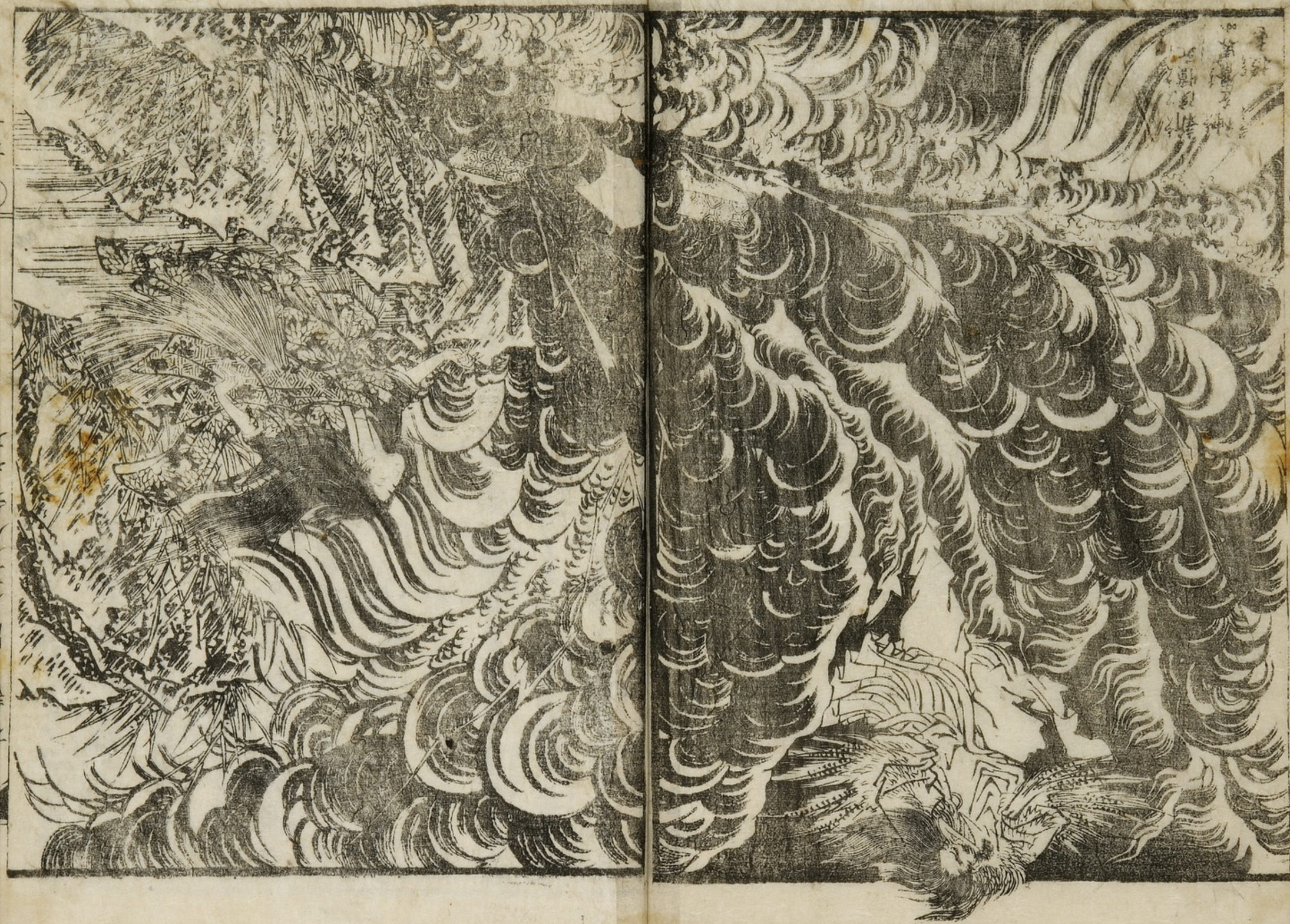
頼長を相語爲義に石集會既に干戈を動ひとゝ命運全うふざれハ只一戦に打負〳〵ゝ嶋守とゝ物に朕が爲に命を隕りのいとをだ〳〵いとゝを志ゝ就中爲義が駿の子ともを捨〳〵あ〳〵ゝ愛〳〵ゝもおぼえ〳〵それも芥らぬ汝白縫〳〵婦女子の子なりて八年が間朕に志をとゝせるゝ賞さるゝにあはりあてとの誠忠のうれしさに朕ゝの祖をもちゝとゝ保元の播乱に朕が人慾の私に起ゝ古院の崩ひ悼ぶ時を得ぬ鏃を研せ漫に位を爭ひ〳〵とよなれ身の不孝に〳〵地祇にもこゝさされかゝれ嶌峯にさすゝぬるゆ。ゝ過を畏ゝ偏に正覚に志し二年の程に五部の大乘経を書写しれと貝鉦の音もゆえぬ荒磯に哀〳〵筆の跡とゝ洛

の中に入れ給へ。仁和寺の西室の許へ持つて行き給へ。
濱手なる詠ハ松山の音をのゝ〻と悟
と詠ず。経を〻〻送り〻る。倘咒咀のところ〻や。彼信西が奏〻る
ところも留め遣されぬ。朕ハ不孝の罪深く悔
く。既に仏門に入るとも。猶疑し。信西が阿諂の言語を諾する。雅仁
が行の道にあらざる。義朝に仰て父の爲義を討せ給ふ
いかゝ愚なりける。孔子も既に云る所なり。明王父に事て孝なり
故に天に事て明なり。母に事て孝なり。故に地に事て察なり。長幼順に
〻〻上下治〻〻と云り。夫天子ハ萬民の父母と〻〻。孝なれば天下に則れ
その父罪ありとも。その子に仰せ〻討せんハ民に虎狼のこゝろを教る
なり。仁をもて民の父母といへり。又彼義朝こそ憎〻もあるまじけれ

親兄弟ハ朕が〻いとおしむる所。彼ハ父にもつるぞ〻〻攻伐せ己が栄
利に走り〻父を誅す。聊も子たるの道をもつぶ縦勅命なりとも。い〻
〻ひもとれを固辞。許されざるを。彼それをもて及ぶ
当初爲義が朕が方へ来る所あり〻と思て。面を犯〻これを諫め従ハ
目眼前死〻。忠孝を全〻せ。父子相別れ〻戦の恨もあり。父を殺さの
歎もあり。か〻君臣悉く道に違ふ。彼あいにくの栄も傷痛く
筆の詠ぶに留られねば。烏の頭ハ白〻なるも落涙すべきぞ。
ごとの経文を魔道へ回向〻れ生なぶ魔王となりて憎〻しかりし義朝
信西おハいかもさ〻。雅仁ハ死せんと誓を〻て。日こゝ〻祝こゝ〻
懸念忌ぶ〻ひあり〻。まづ信頼義朝に謀反のこゝろをつけ。信西を殺
させ。又義朝をハ家隷長田に討せ〻。父を誅するの天罰を示し。又清盛に

驕者のこゝろを憑み。雅仁を押籠まゐらせ。すべての讐ハ過半とゝ一剿しつ
今ハ清盛が氏族親族のみ残るのみ。こゝ久しくして彼ホをば當國へ
引よせ。この海原の水屑とおさんこゝろ願五年ホ及び。やゝ成就
の時至れハ汝ら見るべし。今をもてあくまで。又今を終りとそゝ傾き去
るべしと仰されハ。白縫いとゝうち泣く。君かくまで平家を滅さんとおぼし
召ハ是より伝ハ松よめられ。潜ホ爲朝が配所近き國へ渡ゝせまゐ。東國
ハ甲斐信濃ホ一條武田の黨。上野下野ホ新田の一族。常陸ホ佐竹あん
と。又駿の源氏もあり。君渡御まゐせしとゝ。馳参らんの志
なんとくくと勸めまゐれハ。新院御頭をうちふりまひ。愚なるこゝ念願
成就しく命旦夕迫れるものを。何の益ありく東へハ赴くべきさまにと汝が
誠忠のこゝろ報ひせでハあるべきぞ。つゝおりて汝分鏡の契うちく

しく夫婦の縁ホ一既ホ絶えぬ。とても添果んこゝろもあるべねど。
朕が霊夫婦が護神とありく三年が程ハ爲朝ホ逢まゐ。今
より白峯の奥なる児嶽ホ隠まゐ時を俟。ゆゑ疑ひ面あらば驗を
せんと仰もあくまで。彼経机を高く捧ゝ衝と御軀を起しまひ且く
呪文を唱つゝ。駿の法経を海上へ破落くくと擲ちまへハ風颯とおろ
来くく。忽地逆まく浪のまゝ潮水激くく立のぼり。鯨鯢の吹く
ホ髣髴くり。時ホ一道の黒氣玉體を掩ひ隠まゐ祓とそあれ。電光
ちらくり。雲間よりあやくの御姿隠くくくく



と生えしとの秋まぐもる月國司の守護忽あふざれば。かくぐくしく消ぬる
まつるのかなのせまるねどころ六年来執念おハしませしのあ不御魂のこと幻
顯れて。人ゐも見えるひしとぞ。ある日後の扨ぐりハ編と継巻を更續く
著し三十冊と全本とを

椿說弓張月前篇卷之六

乙丑仲冬始起草使畫匠壮齋主人
綉像之至玄冬下旬稿成投書肆
飯台
曲亭馬琴誌

爲朝外傳 椿說弓張月 全本五篇三十冊
稗史之一大奇書

文化四年丁卯春吉旦發販
本所松坂町
東都書賈 平林庄五郎藏梓

拾冊

撰集抄